大自然を満喫

下田地区のシンボル八木ヶ鼻の周辺では、
一年を通して四季折々の大自然が楽しめる。
春は新緑とヒメサユリ、夏はキャンプ、秋は紅葉、冬は白鳥と、
いつ来ても、何度来ても楽しい下田地区に足を運んでみよう。

八木ヶ鼻周辺エリアの自然・風景

八木ヶ鼻オートキャンプ場 Map E-7

八木ヶ鼻と「いい湯らてい」のすぐ近くにあるキャンプ場。自然に囲まれた絶好のロケーションが魅力。

アクセス 北陸自動車道 三条燕ICから車で約45分
問 八木ヶ鼻オートキャンプ場管理組合
☎ 090-7199-9547（管理組合携帯電話）
所 三条市北五百川143
料［テントサイト］
日帰り1,000円、1泊2日2,000円
［コテージ］
日帰り8,000円、1泊2日12,000円 ※要予約
駐 20台

中浦ヒメサユリ森林公園 Map E-7

見渡す限りの自然の中、森林浴はもちろん、キャンプに釣り堀、アスレチックなど、一日中楽しめます。

アクセス 北陸自動車道 三条燕ICから車で50分
問 中浦ヒメサユリ森林公園管理組合
☎ 0256-46-4997（管理組合）
所 三条市中浦143番地
駐 55台

**しただの旬情報は
うきうきしただ郷ブログを
ご覧ください。**
http://shitadagou.niiblo.jp/
うきうきしただ郷　検索

八木ヶ鼻 Map E-7

200mの岩壁がそそり立つ壮大な景色に圧倒される。ハヤブサの繁殖地として新潟県の天然記念物に指定されている。

問 三条市営業戦略室観光係
☎ 0256-34-5511（代）
所 三条市北五百川
駐 15台

北五百川の棚田（日本の棚田100選） Map E-7

粟ヶ岳の裾野に位置し、清流駒出川が流れるこの地域の棚田は、日本の棚田100選に選ばれている。自然と人が作り出す里山風景はどこか懐かしさを感じさせる。春には粟ヶ岳を背景にカタクリが咲き誇るなど、四季色とりどりに美しい景色が楽しめる

アクセス 北陸自動車道 三条燕ICから車で約45分
問 三条市営業戦略室観光係
☎ 0256-34-5511（代）
所 三条市北五百川408
駐 5台

白鳥の郷公苑 Map E-6

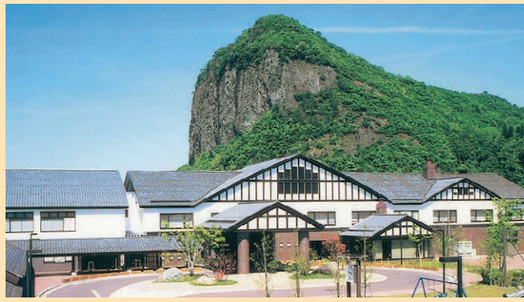
毎年11月頃～3月頃、森町の五十嵐川沿いに白鳥が飛来する。多い時では400羽近くが飛来し、すぐ近くで見られるとあって親子連れに人気を集めている。

アクセス 北陸自動車道 三条燕ICから車で約40分
問 三条市営業戦略室観光係
☎ 0256-34-5511（代）
所 三条市森町1774番地1
駐 40台

八木ヶ鼻温泉 いい湯らてい Map E-7

懐かしい風景が残る下田地域にある日帰り入浴施設。景勝百選にも指定された八木ヶ鼻のすぐ近くにあり、温泉大浴場と露天風呂からその雄大な姿を一望できる。周辺には白鳥も飛来する清流五十嵐川や守門川が流れ、山々の四季折々の美しい景色も楽しめる。お風呂のほかにも地場で採れた旬の味覚や郷土料理を味わえる。

絶景八木ヶ鼻を眺めながらのんびり湯につかる



アクセス 北陸自動車道 三条燕ICから車で約45分
問 八木ヶ鼻温泉 いい湯らてい
☎ 0256-41-3011
所 三条市南五百川16-1
時 開館10:00／閉館22:00（最終入館受付21:15）
料［通常料金］大人950円 子供600円
［午後5時以降入館］大人750円 子供400円
（浴衣上下、バスタオル、フェイスタオルがセットの場合）
駐 250台
休 毎月第3水曜日（祝日の場合翌日）
URL http://www.iiyuratei.com/

ちょっと足をのばして

諸橋轍次記念館 Map E-7

アクセス
北陸自動車道 三条燕ICから車で約45分
問 諸橋轍次記念館
☎ 0256-47-2208
所 三条市庭月434-1
時 9:00～16:30（入館は16:00）
料 一般・高校生500円、小中学生200円
駐 100台
休 毎週月曜日（祝日の場合は翌日）、
年末年始（12/29～1/3）
URL http://www.city.sanjo.niigata.jp/kanko/

生家を含む小高い丘に記念館や広い庭園などが整備され、一帯は「漢学の里」と呼ばれている。記念館には博士の遺品、遺墨をはじめ文化勲章、大漢和辞典関係の資料など貴重な資料約200点を展示。博士より寄贈された「諸橋文庫」を中心とした図書室、多目的ホール、研修室、和室などがあり、幅広く利用できる。

諸橋轍次（もろはし てつじ）

漢学界の最高峰を極めた『大漢和辞典』の編纂者

諸橋轍次博士は、明治16（1883）年に旧下田村（現三条市）に生まれた。東京高等師範学校を卒業後、母校で教鞭をとり、大正8（1919）年からは漢字の故郷である中国へ2年間留学される。帰国後の昭和3（1928）年より『大漢和辞典』の編纂作業を開始。昭和18年にようやく第1巻の刊行に至る。戦争をはさみ、昭和35（1960）年までに全13巻を刊行した。昭和35（1960）年現皇太子徳仁親王の御降誕に際して、御名号・御称号を勧申された。昭和40（1965）年に文化勲章を受章。昭和57（1982）年に100歳で亡くなるまで、文学と故郷をこよなく愛した。